

# 山と博物館

第44巻 第1号 1999年1月25日

大町山岳博物館



おてんしょうだけ だいてんそう  
大天井岳と町営大天荘

撮影 小林 健

## 山小屋で働いて

小林 健

山の季節の移り変わりをゆつたり見ていられるというのは、山小屋で働いている者の特権です。私は北アルプスの大天井岳にある小屋、町営大天荘の職員です。町営というだけあって、私は公務員で、以前は役場で事務の仕事をしていました。山小屋勤務になって今年で二年目になりますが、それまでは山というものにはほとんど興味がありませんでした。しかし、登山者として話をしたり、毎日違った景色を見ているうちに少しずつその魅力に気付き始めました。

私たちが実際に山小屋で過ごす期間というのは、六月中旬から十月中旬の約四ヶ月間です。この期間というのはほとんど雪が積っていない季節です。しかし、六月の小屋を開閉する時期は、大変寒さが厳しく小屋の中でも暖房器具がなければ居られません。ですから、実際の冬山というものは経験しませんが、四季を通じて山にいろいろな感じがあります。そして、この四ヶ月間というのは、雪解けからまた雪がつくまでのいろいろな季節の移り変わりを味わうことができます。

雪解けの時期には、雪の解けた後の砂地から新しく吹き始めるコマクサなどを見ることができたり、ほかの山々の雪渓が少しずつ解けて無くなっていく姿を見ることがができます。この季節が終わると、今度は登山客が大変多くなる夏山シーズンです。この時期というのは山小屋業務に追われ、あまりゆつくり景色を眺める時間はありませんが、忙しい仕事の合間に見る日の出や日の入り、また満天の星空というものは何もかも忘れて心を落ち着かせてくれます。

夏山シーズンが終わるとしばらくはのんびりとしています。この時期には紅葉があり、日に日に赤や黄色に色づいていく山々をゆつくり見ることがができます。そして、ライチョウが白く衣替えを始めるのとまた小屋閉めといった感じがあります。

職場から空を見上げると、すぐそこに感動があるというのとはとても幸せなことだと思っています。山小屋から次の職場への辞令はいつ出るのかわかりませんが、山小屋で働いている間はこの特権を満喫したいと思っています。

(穂高町役場職員)

# 大町市の猿害とニホンザルの分布

泉山茂之

はじめに

大町市では、一九七八年からサルによる農作物への被害額の報告が始まり、一九九〇年の一、五八三万円を最高にして、一九九七年までの被害総額は六、二〇九万円になりました(図一)。また、一九八二年からはサルの有害駆除が行われるようになり、その駆除数は近年になって急増し、一九九七年までの駆除総数は九五〇頭にもなりました(図二)。

大町市では、有害駆除は銃器によって行われています。聞き取り調査からは、最も早くサルが出現したのは一九七〇年代後半のことで、珍しく、可愛かったサルは、やがて群れで出現するようになります。サルがやっかいな動物であることを知るのには、長い時間は必要ではありませんでした。リンゴやイネなどの大切な農作物が、被害に遭うようになりました。ここ二〇年の間に猿害は恒常化し、サルの農耕地依存の生活が定着しました。おまな対策として、有害駆除が実施されてきましたが、被害の軽減に結びついていないとは考えられません。では、いったいどうしたら良いのでしょうか。まず、サルのことを知る必要があります。

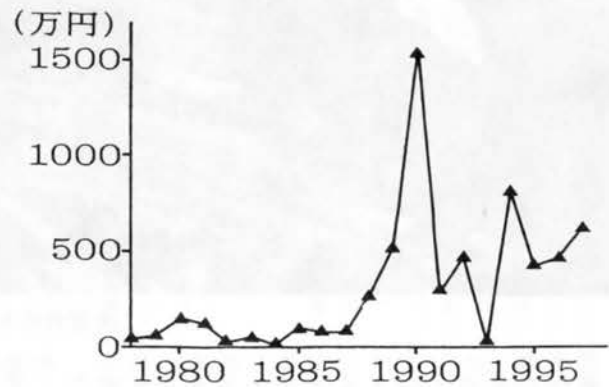
サルの分布の現況

調査は、サルの群れの個体を捕獲して電波送信器(テレメーター)装着を実施し、方位探査を行い、群れの特定および行動追跡を行

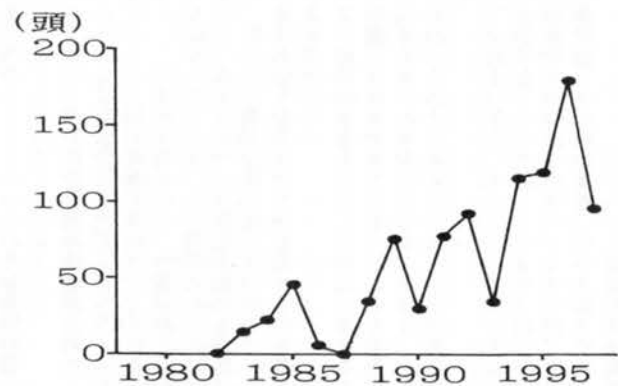
う、ラジオテレメトリー法により実施しました。このため、テレメーターにより群れを特定して、確実に群れを識別しました。また、サルの発見後は双眼鏡等により直接観察を行い、行動、採食物、個体数、利用環境等についての詳細な記録を行いました。

日本には、サルの仲間としては唯一ニホンザル(Macaca fuscata)一種のみを産します。ニホンザルの北限は下北半島、南限は屋久島です。ニホンザルはメスとコードモの個体を中心に、一五頭から一〇〇頭ほどの群れ生活を行っています。メス個体は一生を出生群で過ごしますが、オス個体は五才を過ぎるとほとんどの個体が出生群から離脱してゆきます。オス個体はヒトリザルとよばれる単独生活をおくるか、オスグループといわれる複数のオス個体と行動したり、別群への移籍を行います。このため、ニホンザルの生活の単位はメスとコードモで構成される群れで、群れ内に占めるオスの成獣の比率は通常オトナメスの半分程度にしかなりません。この、ニホンザルの群れの連なりが個体群と呼ばれます。北アルプスには広大なニホンザル個体群が存在し、大町市はその一部となっています。

大町市において、これまでにテレメーターの装着を行ったサルの群れは、里山を中心とした九群です。このほかに、テレメーターの装着していない非標識群が二群あり、一一群が確認されました。泉山(一九九二)による



図一 大町市におけるサルの農作物被害総額の経年変化



図二 大町市におけるサルの有害駆除数の経年変化

報告からは、高瀬溪谷にはさらに少なくとも六群の生息が確認されており、現在大町市全域には一七群以上のサルが生息していると考えられます。図一三には、各群の行動圏を示しました。サルの行動する範囲が行動圏です。このように、大町市の北アルプス山麓には全域にサルが生息しています。特に里山地域において、各群は行動圏を重複することなく生息しており、各群がしっかりと定着していることがわかりました。しかし、大町市街の東側の山地には、現在サルの群れは生息していません。サルの年間を通しての生息の分布上限は山地帯の上限に一致するとされ、亜高山帯を越えた高山帯への出現は非積雪期に限られていることが知られています。大町市の北

アルプス地域においては、サルの生息可能な地域について、全ての地域にサルの群れが生息していることがわかりました。これまでの調査から、サルの個体数を計算すると、大町市には全域で少なくとも約七〇〇頭のサルが生息していることとなります。そして、このうちの約三〇〇頭が耕作地に加害を行っていることとなります。

では、サルの個体数に変化は認められるのでしょうか。これまでにほぼ全数カウントが行えた群れの性年齢構成から、おおよそのサルの増減の傾向を予測することができました。図一四には、サルの群れの性年齢構成の比率を示しました。既存の資料から、サルの生息条件により次のように分けて示しました。

図-3 大町市におけるサルの群れの分布  
(●印はテレメーターによる調査)



一、非加害群・耕作地への依存はなく、生息条件が厳しい一群。  
 二、加害群・耕作地への依存があり、生息条件は、ほど厳しくない一群。  
 三、餌付け群・人から餌をもらい、個体数がどんどん増えている群。  
 各グループの性年齢クラスからは、三、の個体数の増加傾向が認められるグループでは、明らかにメスの比率は低く、コドモの比率が高い傾向が認められます。このため、大町市

に生息する各群の性年齢クラスを比較しましたが、大町市においてはすべての群れとも著しい増加の傾向は認められませんでした。聞き取り調査で、コドモがたくさんいるために、サルはどんどん増えているという話しをよく聞きますが、サルの集団はもともとメスとコドモで構成されているもので、サルの増加を示していることにはならないのです。

分布の変遷と猿害の定着  
 聞き取り調査からは、もともと里山にはサルはいなかったという話をよく聞きました。大正一二年(一九二三年)の長谷部言人による「東北帝国大学医学部による全国ニホンザル生息状況のアンケート調査に対する各郡、支庁、島の回答資料」からは、  
 平村・・北アルプス連山のハイ松帯及び白  
 常盤村・・国有林上部の白松帯に生息するも  
 前者(平村)に比  
 し寡なり  
 とあります。両地区とも、大正時代には深山にのみサルが生息していたことが伺えます。

では、両地区へのサルの出現はいつ頃から始まったのでしょうか。聞き取り調査からは、常盤地区では平地区よりサルの出現は早く一九七〇年代後半であると考えられました。一九八〇年頃、長畑地区ではヒトリザルに餌を与える人も現れ、サルの耕作地へのへの接近を助長したものと考えられました。平地区への出現は

これよりも遅れ一九八〇年代に入ってからであったと考えられます。

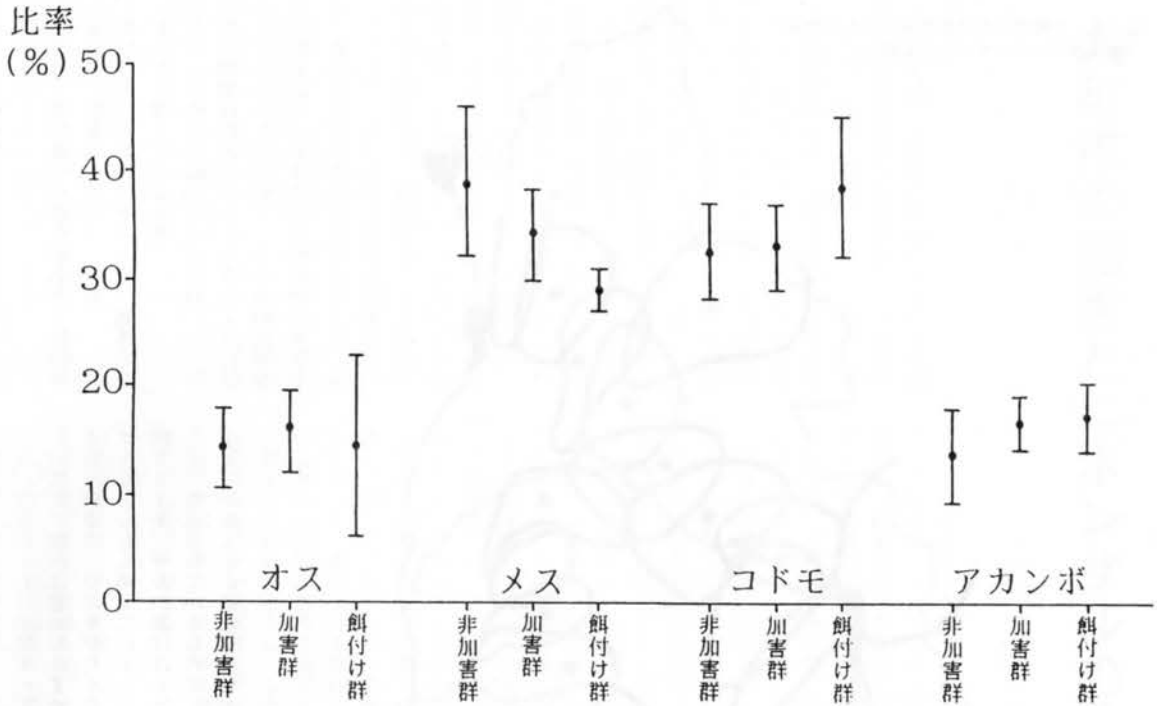
サルの出現は、初期の段階では数頭であったものが、住民による耕作地からの追い払いなども一貫して実施されてこなかったために、群れの耕作地への加害が定着していったものと考えられます。常盤地区でのサルの有害駆除は一九八二年より開始され、平地区ではこれより遅れ一九八八年より実施されるようになりました。では、サルの里山への出現、耕作地への加害はどうして引き起こされるようになったのでしょうか。聞き取り調査とアンケート調査から、人々が考えていることをとりまとめると以下のようになります。

人間側の理由・・スキー場やダム建設による開発事業ですみかを追われた。  
 人が山に入らなくなった。  
 餌付け。

サル側の理由・・楽に食物にありつくことができる。  
 頭数の増加。  
 人慣れ。

これらの回答は、猿害発生理由として、これまでに指摘されてきたこととはほぼ一致すると考えられます。一般に猿害発生原因として指摘されてきた点をまとめると以下のようになります。  
 一、一九六〇年以降に進められてきた国有林の拡大造林政策により、奥山の落葉広葉樹を皆伐して有用なカラマツなどの針葉樹を造林したことにより、本来の動物の生息地を消失させた。

二、日本の近代化によるエネルギー革命により、かつて薪炭林であった里山は荒廃して落葉広葉樹林が生い茂り、新たな動物たちの



非加害群 n = 11, 加害群 n = 10, 餌付け群 n = 9

図-4 サルの群れの性クラス構成

生息環境を提供した。

三、農林業の衰退により、農村の高齢化が進行し、動物が耕作地に出現しても追い払いが行われなく、動物の耕作地利用が定着した。

四、スキー場やダムの大規模開発が奥山にまで及び、のり面などのシバ草地の出現や植栽木など新たな環境が作り出され、動物そのものの生息環境が変化してきた。

などが挙げられます。猿害の問題はきわめて根が深い、難しい問題であると言わざるを得ません。

将来に向けて

大町市では、これまで手をこまねいていたわけではありません。猿害防除のこれまでの試行錯誤からは、以下のような要約が可能であると思われまます。

(一)日本の行政が、これまでの三〇年間行ってきた猿害対策の柱は有害駆除という個体数管理でした。この対策は悪者であるサルを駆除することからガス抜きにはなりませんが、根本的な解決にはなりませんでした。逆に駆除数の増加とともに被害も増加しました。もはや、サルの有害駆除という個体数管理による猿害防除は不可能でしょう。被害を引き起こしているサルを全て捕獲しても、すぐに奥に控えているサルがたくさんいます。大町市のすべてのサルの捕獲は不可能です。

(二)サルの餌付けは被害を拡大させるので今後一切行つてはなりません。人慣れたオス個体は周辺に分散して猿害を引き起こします。県道扇沢線や大町ダムへの観光客や別荘の人たちに、サルに餌をやらぬように徹底させなくてはなりません。人慣れたサルの自然への復帰は困難です。

(三)価値の高い作物の防除にはフェンス型の電気柵により防除するしか方法はありません。

電気柵の設置やメインテナンスには、さまざまなノウハウが必要です。サルに負けないという強い気持ちは何よりも重要です。爆音などの威嚇による効果は全く期待できません。

(四)最も効果の上がる猿害防除法は、人による追い払いです。この際、テレメーターによる行動追跡は有効です。人の絶えずいる耕地には猿害は発生しません。野生のサルは決して人を襲ったり噛んだりしません。一斗缶をたたくのでも花火でもかまいません。とにかく真剣に追い払いを行い、耕作地に来るといやな目に遭うことをサルに意志表示することです。また、不用の農作物は決してサルの来る場所には捨ててはいけません。サルには人の不要なものと、食べられたら困る作物との区別はつきません。人が意志表示しなくてはなりません。

(五)猿害防除には、その地域にサルの群れがいくつ存在し、各群がどのように加害しているかを、テレメーター標識により充分調査した上で対策を構ることが効率良い猿害防除につながります。まずは、サルのことを良く知ることが出発点です。

(野生動物保護管理事務所)

山と博物館第44巻第1号

発行 一九九九年一月二十五日発行

〒長野県大町市大字大町八〇五六一

大町山岳博物館

TEL 〇二六-一三三二〇二二

印刷 大糸タイムス印刷部

定価 年額 一、五〇〇円(送料共) (切手不可)

郵便振替口座番号 〇〇五〇四一七三三三三